

〈子どもの心、善悪を超えて〉

ジャーナリスト
松本 侑壬子

第二次世界大戦末期のヨーロッパの片隅で子どもの目に写った大人の世界と戦時下の厳しい日常。双子の兄弟が必死に生き抜く毎日の出来事を克明に日記に綴る――。純真無垢な子どもの心

の心のタフさ。やさしさも暴力性も悪さも聡明さも抱えながら、生きるためにひたすら前へ進むのだ。

原作者アゴタ・クリストフはハンガリー出身の女性作家。自らの故郷を舞台に亡命先で学んだフランス語で書いたベストセラー小説。

第二次世界大戦終戦前年の一九四四年夏。首都ブダペストから双子の兄弟が田舎町にある母親の実家の農園に疎開する。見るからに憎々しげな祖母は、村はずれで一人暮らしの嫌われ者で、村人から魔女と呼ばれていた。「ただ飯は食わせない」と、二人は水汲み、薪割り、とコキ使われる。出発前に父親にもらった日記帳に、二人は見聞したこと

を何でも書くことにする。日記には少年らの鋭い感性が光る。

悪口の限りを投げつけながら、少年らの優しい言葉には敏感に反応する祖母。『魔女』の心の底の寂しさをさり気なく見せる。二人は油断しない。すぐに殴る大人に負けないために、互いに殴り合って体を鍛える訓練をする。目と耳を使わずに生きる練習もする。空腹に耐えるため絶食する。聖書を読むのは読み書きの練習のためだ。

祖母の家の離れに駐留するドイツ軍の将校が台所で寝ている二人の頬をそつと触る。教会の司祭は、貧しい村娘がスカートの下を見せるとお金をくれる。二人はそれをネタに司祭を脅迫する。教会にいる美人のお姉さんに誘われて、一緒に風呂に入る。「美少年ね」と体を洗ってもらうと、何かうれしい。窓の下をぞろぞろユダヤ人たちの行列が川向こうの収容所へ進むとき、彼女

の告げ口で二人の仲良しの靴屋のおじいさんが殺された。仕返しに彼女の部屋のストープにこっそり手榴弾を仕込む二人。捕まって殴られ血だらけになるが、「訓練しているから痛くない」。家で将校が抱いて介抱してくれた。

やがてドイツ軍は去り、新しくロシア軍がやって来た。喜んで兵士らを迎えた村娘は、自宅のベッドで裸にされて死んでいた。突然、母が知らない軍人の車で迎えに来た。赤ん坊を抱いて、「お前たちの妹だよ」と。二人の抵抗で帰っていく車が突然爆発し、夜、祖母と穴を掘り、母と赤ん坊を埋葬する。翌日、兵隊に行っていた父親が訪ねてくるが、妻が他の男の赤ん坊を生んだことに衝撃を受け、廃人状態に。

祖母が心臓発作を起こし、二人は頼まれた通り毒物を飲ませ、楽に死なせる。そして、父を国境の鉄条網まで案内し、危険箇所を教えて送り出す。

すぐに父の爆死の音が聞こえる。そして、これまで決して離ればなれにならなかつた二人は……

冒険も遊びも、常に死と隣り合わせの日常で、少年のみずみずしい感性は、戦争という不条理に試される。

思えば、現在の紛争地へと飛んでいく……



『悪童日記』

ドイツ・ハンガリー合作映画 (111分)

監督：ヤーノッシュ・サーズ

出演：アンドラーシュ・ジェーマント、ラースロー・ジェーマント、ピロシュカ・モルナルほか

10月3日、TOHO シネマズ シャンテ、新宿シネマカリテほか全国順次公開

©2013 INTUIT PICTURES-HUNNIA FILMSTUDIO-AMOUR FOU VIENN